

司会者 米倉 弥生（岡山市立桑田中学校司書）  
記録者 高島智恵子（岡山市立上道中学校司書）

## I 事例発表

### 「学校の中核となる学校図書館をめざして」

#### —岡山市学校図書館自己評価を通して—

岡山市立御野小学校 高嶋 計江

岡山市立京山中学校 其輪 純子

### 1. 学校図書館評価検討委員会の経過報告

#### (1) ルーティンワークの作成とともに始まった

##### 「学校図書館自己評価」

「学校図書館自己評価」を岡山市司書部会で考え始めたのは、2002年度のこと。2000年に子ども読書年があり、2001年には「子どもの読書活動の推進に関する法律」が公布された。また、学校に「情報公開」や「学校評価」などが求められ始めた時代でもあった。

そんな中で、岡山市司書部会では「ルーティンワーク」（どの学校図書館でも同じサービスを提供できるよう、機能の標準化をはかるもの）と「学校図書館の評価指標」についての研修を始める。

一年がかりで『学校図書館自己評価 2003年版』を作成。しかし「司書の仕事ができているかどうかチェックするものなのか？ 学校図書館活動全体を見て評価するものなのか？」ということが議論になり、練り直して次年度再提案することとなった。この時、岡山市司書部会の全員が意見を出し合い、練り直し作業を始めたことは、のちのちのためにも大きなことであった。

2004年度には、有意義な評価を考えていくため「学校図書館自己評価」のプロジェクトチームが作られた。まず「誰が何のためにする評価なのか」を2～3ヶ月かけて話し合い、「学校図書館の活動全体を評価するもの」という基本路線を決定。その後「岡山市としてめざす方向性を出したい」「よりよい図書館について、職員全員が考える材料にしてほしい」と考え、項目を作成していった。今できているレベルよりもさらに改善していけるように、という願いをこめて、少し先を見据えた項目設定にした。

この過程で「学校全体で組織的に『評価』を行うようにしていくには、司書部会の力だけでは無理である」という結論に達する。そこで2005年度には、岡山市SLA専門委員会として、学校現場の先生・市教委の先生・司書で構成される「学校図書館評価検討委員会」を発足させた。また、この年から「評価」を実際に行い始めたが、最初の実施率は73%（実施予定含む）であった。

2006年度には、評価するにあたって分かりにくい項目などについて解説する「手引き」を作成。と同時に、まだまだ共通理解できていなかった「評価」の意義目的を「共通理解事項」と「評価を生かした中長期的な学校図書館の充実」にまとめる。

さらに「評価」を分かりやすくするためと、コンピュータ化に対応したものにするため、改訂にも着手していた。

2007年度、『改訂版』を作成。またこの時点で、「めざす学校図書館像を明確にしないまま、評価するだけしている」という矛盾に気づき、「評価」から見る「めざす学校図書館像」について検討していった。

2008年度には、評価しただけで終わらないよう、「評価」をもとにした分析の流れについて検討している。

#### (2) 学校図書館を学校教育の中に位置づける

##### ための評価へ

2005年に行った司書の全員アンケートより、評価項目が司書寄りの目線から作られていることや、「評価」の意義目的がまだまだ共通理解されていない実態が分かった。

そこで、分かりにくい部分を解説する『手引き』を作成すると同時に「『評価』を、学校図書館活動の改善について学校全体で考える機会にしてほしい。司書一人の仕事チェックではない」と繰り返し提案していくことになる。

### (3) 「改訂版」の作成

一方で、「手引きが要るようなものでは実施しにくい」との意見も上がり、改訂に着手することとなる。改訂にあたっては、「現在よりも少し先を見据えた評価項目にし、学校図書館のめざす方向を学校全体で考えていける評価にしたい」と考えて、作業を進めていった。

## 2. 学校図書館が学校の中核となるための「評価」とは

### (1) 評価の視点や項目の見直し

学校図書館評価検討委員会において、学校現場の先生・市教委の先生・司書の三者が一緒になって「評価」を改訂していったことは、大変大きな成果を挙げた。専門用語が使われていた部分や、司書の視点から書かれていた部分は、変更して学校全体で取り組めるようにした。また、一つの設問に複数の要素が含まれていた部分もあらため、評価しやすいようにしていった。評価結果をリーダーチャートで示すシステムが完成したのも、この改訂のときである。

### (2) 「今できていることの評価」から

#### 「改善のための評価」へ

同時に「今できているレベルよりも少し先のことを組み込むことで『評価』を図書館の改善に役立てられるのではないかと指摘もされ、評価を通して絶えず学校図書館を改善・充実させていく方向性を出すことができた。

さらに、この「評価」をするにあたって、何をめざすのか・課題や目標をどう見つけていくかという到達点が表示されていないことが、この時点で問題となった。そこで、順番が逆であったが、「評価」をもとに「めざす学校図書館像」を作成。経営・管理・支援の三つの柱で図書館を見ていく「めざす学校図書館像」が出来上がった。

### (3) 結果集計で終わらずに結果を分析し、

それを経営に生かすことが重要なのだという指摘

その後さらに「結果集計だけで終わらず、結果を分析し、次に生かしていく方法まで示してはどうか」という新たな課題も見つかる。各校それぞれの実態があり、事

例紹介では意味がないため、「評価」と学校教育目標・学校図書館目標・岡山市の教育目標などとの関係性を図示する「概念図(案)」を作成。さらに、図書館内部だけを見ていたのでは分からない部分を見ていくため、例としてSWOT分析のような俯瞰的・外部的視点を加えることも提案している。

## 3. 「学校図書館自己評価」を生かした学校図書館運営

これから「評価」を、各校でどのように生かしていくか。まだまだ実践も議論も十分でないところではあるが、実は「評価」の話が始まったころから提示されていたテーマでもある。

### (1) 「評価」を共有する

評価した過程・結果・分析を校内で共有することが、まず重要である。複数の視点が入ることで、客観的に信頼できるものとなる。そして、この「評価」に取り組む担当者ひとりひとりが、参画意識を持って図書館の機能や課題について考えるようになる。組織として学校図書館運営を行う体制作りの第一歩である。

### (2) 「評価」の分析から、計画的な整備・運営へ

さらに、「評価」を行う担当者すべてが「評価」の意義目的や位置づけを理解し、PDCAサイクルを生かした学校図書館運営が毎年行われていくと、中長期的な視点に立った学校図書館運営が可能になる。担当者の異動などにも影響されることなく、計画的な蔵書の整備・系統だった図書館教育の実施など、ブレない運営をしていける。

### (3) 中学校区で取り組む「評価」の試み

岡山市も「岡山型一貫教育」を提唱しているところであるが、このたび初の試みとして、中学校区の司書が「評価」を持ち寄って話し合いをした。中学校区で共通している点がやはりあるので、改善プランも一緒に考えることができ、長い目で子どもの成長を見ていくことの必要性も話し合うことができた。また複数の目で見ることによって「評価」の客観性・信頼性もさらに高まり、改善プランを実施・発信する際の力とすることができる。

## 4. これからの課題

### (1) 『岡山市学校図書館自己評価』における

評価結果の分析の流れ

「学校図書館自己評価」の分析からは、図書館内のことを細部まで見ることができる。しかし、図書館の外部環境について検討する視点や、経年的変化を見ていく視点など、「評価」にない視点をプラスしていくことが必要である。このひとつの例として、SWOT分析を用いた「流れ(案)」を作成した。さまざまな視点から見えてくる結果を関連づけ、図書館の改善プランを検討し、校内に発信して実行する、という構成になっている。

## (2) 岡山市の学校図書館全体のレベルアップを

岡山市全ての学校で「評価」を行うことで、参画意識を持って図書館に関わる人が増え、絶えず改善プランが練られていく。そのことが岡山市の学校図書館全体のレベルアップにつながっていく。それが「評価」作成の意図であり、大きな課題でもある。「評価」は、これを行うこと自体が目的なのではなく、学校図書館を改善していくための手段(ツール)である。

学校図書館評価検討委員会の活動は終了したが、今後は岡山市SLAの研究部に引き継がれる。今後も、岡山市の学校図書館全体としてさらなるレベルアップをはかっていく。

## II 質疑・応答

Q.子どもにどこまで図書館サービスを提供できているか、どのように子どもを育てていくのか。形式だけでなく内実を伴って、子どもの成長をはかるというのは難しい。数値化できないところをあえて客観的に表すということで、文言等を工夫したと思う。自立・自己実現できる子どもを育成する学校図書館でありたいし、「評価」はそれをつくるためのツールであって欲しいが、どのように書けば、子どもの育ちや実践について評価することができるのか。今後の考えを聞かせて欲しい。

A.この「評価」はあくまで、誰でも客観的に行えて、結果がブレないような部分を取り上げている。これだけで図書館活動の全てを網羅してはいないと思っている。ただ、めざす方向性や思いは、文言の中にできるだけ含めるようにしている。(例:授業への支援⑥では「担当教諭と学校司書で活動を振り返り、児童・生徒の利用の様子や授業の狙いが達成できたか等の観点から、資料の量や内容、支援の方法が適切であったかを振り返っている」と明記し、めざす方向性が見えるように

している)また、「評価」は単に数字だけを見るものではなく、それを元に話をするためのものである。話し合いの中で、子どもの成長ぶりや教師の思いなど、いろいろなことが見えてくると思う。

Q.『「評価を生かした中長期的な学校図書館の充実」概念図』(資料P.14)に「岡山市のめざす学校図書館像」があるが、ここにある「読書センター・学習センターとしての役割を担える環境が整った学校図書館」という文言からは、学校図書館の日常的な姿(子どもの居場所としての図書館e t c.)が見えにくい。まだ“案”ということなので、この言葉を再検討して欲しい。

A.“案”は「概念図」全体のことである。「岡山市のめざす学校図書館像」の部分は、すでに前年度承認されている。ただ、指摘の内容はその通りだと思うので、今後SLA研究部等で検討していく際の参考とさせて頂きたい。

Q.岡山市教育委員会がとても積極的に関わっているようで、うらやましい。これは教育委員会として体制ができているのか。それとも担当の方が個人的に熱意ある方だったのか。

A.岡山市教育委員会指導課には、学校図書館を担当する係が前々からずっとある。この係と連携し、アドバイスを受けている。2002年度まで担当だった方は、学校現場に戻られたが、評価検討委員会にはその後もずっと関わってくださっていた。

Q.発表の中では「保・幼・小・中・公共」の連携が強調されていたが、高等学校図書館とのつながりが薄かったように思う。高校との連携に関して、どう考えているか。

A.小学校・中学校からすると、高校に行っても公共図書館に行っても、しっかり図書館を使えるようになって欲しいという思いを持っている。高校とは連携の機会がなかなかないが、できたら面白いと思う。